

〔Math. Scand., 50, 73 (1982)〕

〔数学研究室〕

Strongly Annular Functions with Given Singular Values

AKIO OSADA

与えられた特異点をもつ強環状関数

長田彰夫

強環状関数 $f(z)$ に対し、方程式 $f(z)=w$ の解 z が有限個しかないような複素数 w のことを、 $f(z)$ に対する特異点という。従来、特異点を実際にもつ強環状関数の存在は不明であった。ここに、次の様な逆問題が提示される動機がある： n 個の点 (n は無限大をも含む) を与えたとき、それらを特異点とする強環状関数は存在するか？ 先年 K. Barth, D.D. Bonar, F.W. Carroll, 及び筆者により夫々独立に、 $n=1$, $n=2$, $n=\infty$ の僅か 3 つの場合に対しては、その存在が示され、部分的解決をみた。この論文は上記問題に対する完全にして肯定的な解決を与えるものである。

〔一般教育学会誌, 4 (2), 62 (1982)〕

〔物理学研究室〕

技術を核とする一般教育

坂 恒夫

The General Education Including Technology as the Core

TSUNEO BAN

一般教育の教育科目の内容は、人間的諸価値との、それが機能する社会との、他の専門諸科学との関連が明確であること、換言すれば人文・社会・自然の諸科学と融合したものであることが要求される。イギリスの植物学者アシュビーは、この科学間の融合を技術が行うと主張する。事象を全体性において理解する習性は、技術的ヒューマニズムの真髄であり、技術を接合剤とする科学の人文主義化、社会化、総合化が可能であると主張する。このアシュビーの主張の可能性と問題点を技術の本質に対する根底的な問い掛けを行うことにより、議論した。その結果、次の結論を得た。技術には必ず行為が関連し、行為が満足していく結果を生むためには、行為を行う人間、行為が行われる社会および行為が関連する諸科学についての有機的つながりを持つ全体的な認識が要求され、諸科学の人文主義化、社会化、総合化の契機となる。技術が要求する認識は行為のための認識であり、行為は状況が要求するものであって、認識のために十分な時間がとれないが、これが技術の災禍の原因となる。だが、これは事象を全体性において理解するという技術的ヒューマニズムの貫徹により克服されうる。アシュビーの方法では、一般教育の重要な柱である人間教育が抜け落ちるが、行為のための認識は人間存在論的にも根源的な認識であり、人間の行為と技術とを結びつける行為論を展開することにより、技術を核とする一般教育が可能である。